



上野敏男さん

羊天 伝統の手技 第十回

創業百年の歴史を誇る「上野和裁」。

三代目・上野敏男さんは和裁界における「現代の名工」である。

ほどよい加減を持たせて縫う「腕加減」にこそ、その真髓があるのだ。

仕立て師の腕は、着手の好みを盛り込んで作っていくところにある。その腕は、「人さし指に目がついている」ほどの技術によって裏打ちされているのだ。

厳しきの裏返しでいう「仕立ての基本は手加減、目加減、良い加減」

ショーウィンドウを眺めながら明るい店内に入ると、衣桁にかけられた見事な打ち掛けに目を奪われる。それにしても美しい仕立てだ。上質なしつとりとした絹の質感を割り棲仕立てという珍しい技法で仕上げた一枚は、重厚感の中にも気品を漂わせる。

JR御徒町駅から徒歩5分。雑居ビルが並ぶ一角に店を構えるのが、創業百年の老舗、「お仕立て処うえの」だ。同店の三代目が「現代の名工」の称号を持つ和裁界の第一人者、上野敏男さんである。

和裁士の仕事は通常、問屋や百貨店との取引が主で、消費者と直接顔を合わせることはない。そこで上野さんは、お客さんの声をじかに聞き、作り手の顔が見える物作りを通じて、和裁の技術を知ってもらいたいと、平成15年に店を改装。消費者からの直接注文も受けるようになった。

「着物作りで一番大切なことは、いかにその人が着やすいものに仕立てるかということ。たとえば、若い頃と同じ身長なのに当時の着物を着ると、丈が短くなっていることがあるでしょ。あれは、着物が縮んだわけじゃなくて、中年になって肩に肉がついたり、腹が出てきて体の厚みが変わったから。その微妙な体の癖を布に縫い込んでいく。それが仕立て屋の仕事なんです」

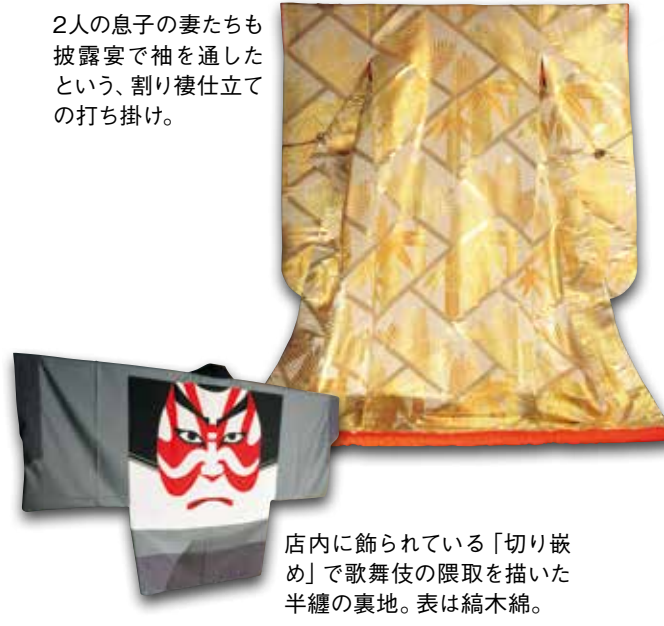
加えて、ゆったり着たいのか、着流し風に着たいのか、といった着手の好みを盛り込んで作るのも、仕立て師の腕だ。

「昔から仕立ての基本は、手加減、目加減、良い加減（笑）っていつてね。採寸しても、寸法どおりにキチンと縫うんじゃなくて、ほどよい加減を持たせて縫うのが、いわば「腕加減」というわけです」

着物の仕立ては、検反に始まり、検品、裁断、へら付け、縫製、仕上げの順。基本的には、それを一人の職人が行なう。

「和裁はその工程によって覚えることが多い仕事。でも結局、物を作るのは人ですからね。だから、技術を伝えるには人作りが大切。実はそれが一番難しい」

これまで百人を超える弟子を育ててきた上野さん。そう語る自身にも、厳しい修業時代があった。



2人の息子の妻たちも披露宴で袖を通したという、割り棲仕立ての打ち掛け。

店内に飾られている「切り詰め」で歌舞伎の隈取を描いた半纏の裏地。表は縞木綿。

仕立て屋の人さし指には目がついているんだ！

が、明治43年に開業。小さい頃には船の設計士に憧れた上野さんが、二代目である父・直吉さんに弟子入りしたのは、18歳のときだ。長男として家業を継ぐことに抵抗はなかったが、

「いざ修業を始めると、同級生からの電話も取り次いでもらえない、同業者との付き合いもないが、明治43年に開業。小さい頃には船の設計士に憧れた上野さんが、二代目である父・直吉さんに弟子入りしたのは、18歳のときだ。長男として家業を継ぐことに抵抗はなかったが、

「いざ修業を始めると、同級生からの電話も取り次いでもらえない、同業者との付き合いもないが、

二代目からの教えは、基本的なことだけだったらしい。



和裁の採寸はメートルやセンチではなく、あくまで「尺」「寸」「分」で表される尺貫法だ。着物の仕立てに使う鯨尺は、曲尺で1尺2寸5分。呉服尺は1尺2寸。

鉋には「長太郎」の銘が。上野さんが仕立て師になったときからの相棒。だ。

裁縫協同組合で発注している針は、1たとう、25本入り。

「ミシンの針は直角に刺さるため布を傷める」と上野さんは、すべて手縫いで仕上げる。

上野敏男 Ueno Toshio
 1938（昭和13）年、東京生まれ。早稲田高校を卒業した1957（昭和32）年、18歳で父が経営する『上野裁縫所』に入社。見習い修業に入る。1962（昭和37）年、同社の専務となり、翌年社員だったまさ子夫人と25歳で結婚。1989（平成元）年に同社代表取締役役に就任。40代で、和服の仕立て師としては異例といわれる着物の個展を銀座のサロンで開く。その際、職人仲間からいわれた「お前の親父はアンポンタンだな！ 息子にこんな一銭にもならないことをやらせやがって！」との「最高に粋な褒め言葉」が今でも心に残っている。1995（平成7）年、東京都優秀技能賞を受賞。2001（平成13）年には厚生労働大臣より卓越技能者として「現代の名工」を授与。2006（平成18）年には永年、裁縫業界に尽くした功労を賞して「黄綬褒章」が授与された。現在、東京都和裁技能士会会長。

（有）上野和裁
 東京都台東区東上野2-12-2
 TEL: 03-3834-2927

上野さんに贈られた表彰盾。手前が東京都優秀技能賞、奥が卓越技能賞（現代の名工）。



死んだあとに「あいつはいい職人だったね」といわれたい

「馬を水辺へは連れて行けるけど、水を飲むのは馬だぞ」と。「つまり、教える環境はあるけど、覚えるのはお前なんだぞ、というわけです。ただ、そんな父も日本画の展覧会だけは『マメに見ろよ』と」

「今考えれば、何が美しいか、きちっと自分の美意識を持って、ということだったんでしょね」と

修業時代は、朝6時にコテに火を入れることから始まる。休みは月に2回。晴れ着シーズン前には、連日無休で夜の9時過ぎまで働いた。

「修業は何年やったかじゃなくて、何回暮れを過ごしたか。辛いこともありましたけど、不思議と辞めようと思ったことはなかったなあ」

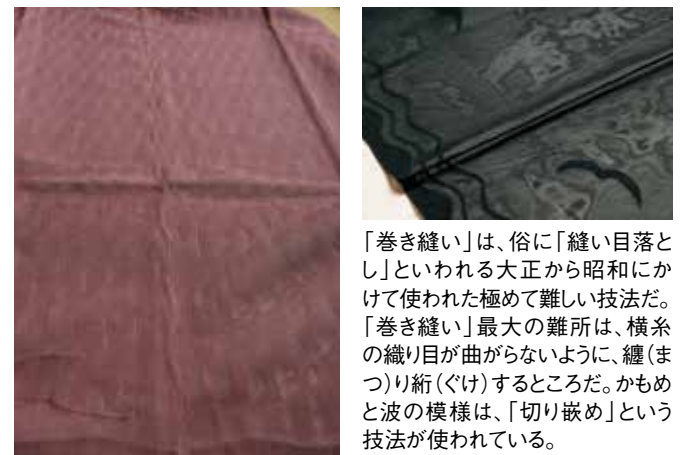
一番苦労した時代だったかも知れませんが」と振り返る。

しかし、その卓越した技術が評判を呼び、上野さんの名はしだいに業界の内外にとどろくことになる。平成5年には皇太子妃雅子様の着物のお仕立ても担当。貴乃花や、石川さゆりなど上野さんにとって、職人とは「誰もやりたがらない面倒な仕事を『お引き受けいたしました』と、いつもと変わらない顔で仕上げて納めるもの」だという。

平成18年、職人魂を貫いていた上野さんに贈られたのが、「黄綬褒章」だった。だがご本人は、「『名医たるより良医たれ』という医者がいるように、職人も名人なんて呼ばれちゃダメなんですよ。だから私は、名人じゃなくて一生『いい職人』でありたい。そう、死んだあとに、『あいつはいい職人』だったねえ、といわれたいですね」

実は上野さん、22年3月に自宅で転倒。右足首アキレス腱を断裂し、2度の手術を経て9月に退院した。

「幸せだったのは、翌日からすぐに仕事ができること。あのと



「巻き縫い」は、俗に「縫い目落とし」といわれる大正から昭和にかけて使われた極めて難しい技法だ。「巻き縫い」最大の難所は、横糸の織り目が曲がらないように、纏（まつ）り紘（ぐけ）するところだ。かめめと波の模様は、「切り嵌め」という技法が使われている。

ご本人も「もう二度とできない」という紗の羽織に施した「よろけの巻き縫い」。業界広しといえど、この縫い方は上野さんただひとりの技術だ。背の中央、身頃を合わせたところが地模様と同じ曲線を描いている。これが「よろけの巻き縫い」だ。



「切り嵌め」は、ひとつの布地を切り取り、別の布地を嵌めあわせて模様を作る。右の写真はその裏の様子。これを返して羽織などの裏地に縫い込んでいく。左の写真は、見返り美人を「切り嵌め」で裏地に縫い込んだ羽織。

きは本当に職人冥利に尽きたねえ。あんなに嬉しいことあなかったなあ」

着物とともに生きて、はや50年。大好きな着物だからこそ、より多くの人によさを知ってもらいたい、と上野さんはいう。

「私の着ている着物なんか、ほとんど親父のだけど、洗い張りをすれば何度でも着れますからね。息子が結婚したときも、親父の紋付を仕立て直して私が着て、私の袴を直して息子が穿てて……着物の中に、私が仕立て屋を始めたときの皆がいる、そう思ったらなんだか嬉しくてね。」

親から子へ、子から孫へと、着物は直せば何度でも使える。つまり、究極のエコなんだね。だから、私はよくいうの、エコのことなら仕立て屋に聞いてくれよ！ って（笑）」

上野敏男72歳。職業仕立て師。もちろん、生涯一職人。

※1枚の反物は、長さおおよそ13メートル、幅38センチ。これを身頃（みごろ）や袖、襟などの8つの部分に裁断し、手縫いで仕立てていく。洋服と異なり、リサイクルを念頭に作られている着物は直線裁ちの直線縫いが基本。そのため、解いて並べると元の反物の形になる。まさに、日本人の知恵が生み出した自然に優しい衣類だ。